

政務活動費 視察・研修会等報告書

視察都市	鹿児島県 南九州市および南さつま市
視察日時	令和 4 年 8 月 9 日 (火) 10 時 30 分 ～ 16 時 00 分
訪問先	知覧特攻平和会館 〒897-0302 南九州市知覧町郡 17881 Tel. 0993-83-2525 万世特攻平和祈念館 〒897-1123 南さつま市加世田高橋 1955-3 Tel. 0993-52-3979
参加者	創志会（園田基博、石渡宏明）
視察目的	第二次世界大戦末期の沖縄戦における特別攻撃隊の記録を学び、世界恒久平和に寄与する正しい知識と知見を養う。

■ 視察内容:

◎ 知覧町の概要:

- ・ 鹿児島県薩摩半島の南部中央に位置。面積 120.19km²、人口 12,923 人（2017 年 11 月 1 日現在）の小さな田舎町。名産品のひとつに知覧茶がある。
- ・ 知覧麓には「薩摩の小京都」と呼ばれる島津家の分家、佐多氏が地頭として治めていた当時を偲ばせる旧武家屋敷群が重伝建地区として保存・整備されており、琉球文化の匂いも漂う石垣づくりの街並みを形成している。
- ・ 但しこの小さな町を最も全国的に有名な地としているのは、先の大戦において、本土最南端の航空前線基地として全国数多くの若者達が特別攻撃隊員として出撃し、南海に散華をしていったその悲しい歴史にある。



↑ 庭園の案内



↑ 典型的な知覧型ニッ家



↑ 大河ドラマ撮影にも用いられた見事な日本庭園や旧家



◎ 知覧特攻平和会館: <https://www.chiran-tokkou.jp/>

- ・ 知覧飛行場は昭和 16 年に大刀洗陸軍飛行学校知覧分教所として開所。
- ・ 太平洋戦争中、東南アジア諸国に近い鹿児島には、旧日本軍の拠点としてここ知覧をはじめとした多くの飛行場が設けられた。(鹿屋、万世等)
- ・ 少年飛行兵、学徒出陣の特別操縦見習士官らが操縦訓練を重ねている中戦況は緊迫し陰悪となるを迎え、昭和 20 年には本土最南端の航空基地としてここから、わずか 20 歳前後の若い隊員達が満州や日本内地から集結をしては、家族そして国の将来を思いながら特別攻撃隊員として、還らぬ出撃をしていった地となる。



↑ 若き隊員達が最期の憩いのひと時を過ごした「富屋食堂」(復元)と「富屋旅館」(現存)。悲しい歴史を今に伝える。

- ・ 沖縄戦での特攻作戦で戦死した陸軍隊員 1,036 名の当時の真の姿、遺品、記録を後世に残し、史実を多くの方に知ってもらい、特攻をとおして戦争のむなしさ、平和の大切さ、ありがたさ、命の尊さを訴え、後世に正しく語り継ぎ恒久の平和を祈念することが基地のあった住民の責務であろうと、特攻基地跡の一角に知覧特攻平和会館が建設をされた。



↑ 特攻勇士像

↑ 営門門柱跡

↑ 慰霊灯籠

↑ 三角兵舎(復元)

↑ 特攻平和会館全景



↑ 身代わり観音像

↑ 復元された戦闘機「隼」

↑ 朝鮮人の特攻兵もいました

↑ 引き揚げられた「零戦」

◎ 万世特攻平和祈念館: <https://kanko-minamisatsuma.jp/spot/7570/>

- ・ 万世飛行場は戦況が悪化の一途をたどる太平洋戦争末期の昭和 19 年の末、吹上浜の松林に軍民一致の協力のもと、秘匿飛行場として急造されたもの。昭和 20 年 7 月までのわずか 4 か月のみ使用された、当時設備や関係書類がほとんど残っていない「幻の特攻基地」とも呼ばれている。
- ・ その跡地に、恒久の平和を祈念するよう建てられたのが当該祈念館。(2021 年 4 月にリニューアルオープン)。館内には、吹上浜沖から引き揚げられた日本にただ一機の「零式水上偵察機」や、死を間近に控えた隊員たちが肉親・愛する人達へ宛てた最期のメッセージ、至純の心を綴った血書、遺品、遺影などが多数展示されている。



↑ 万世特攻平和祈念館 全景



↑ 正面玄関前にて



↑ 敷地内に据えられた慰霊碑



↑ わずか 4 か月



↑ 仔犬を抱いた少年兵



↑ 引き揚げられた水上偵察機



↑ 201 名が万世飛行場から出征

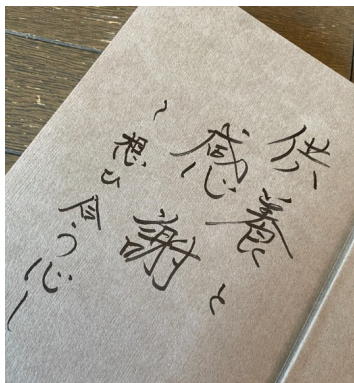
- ・ 帰路に着く前のわずかな時間、館内スタッフの方から話を伺う機会あり。ここ万世飛行場より出撃をした桐生市出身の 4 名の少年飛行兵に関する情報を教示頂いた。(全国ばかりでなく、桐生市からの来館者も多いとのこと。)
- 石原一夫 伍長: 20 歳、飛行第 66 戦隊 (昭和 20. 4. 2 没)
 → 桐生市出身。徳之島より出撃し敵輸送艦に突入。
- 板部昭雄 伍長: 18 歳、飛行第 66 戦隊 (昭和 20. 5. 4 没)
 → 桐生市出身。出撃直前に生じた故障機の代わりに急遽の出撃。
 心の準備や整理もできないままでの出撃散華。
- 荒木幸雄 少尉: 17 歳、第 72 振武隊 (昭和 20. 5. 27 没)
 → 桐生市出身。仔犬を抱いた少年兵としてその写真は象徴ともなる。
- 瀬谷隆茂 少尉: 19 歳、第 432 振武隊 (昭和 20. 5. 28 没)
 → 新里村出身。「神洲不滅」と遺し出撃。

■ 視察成果による当局への提言または要望等：

様々な文献はあるが、先の大戦においては当時世界人口の2.5%に相当する、約8,500万人が犠牲となったことが伝えられている。日本では312万人。うち群馬県における戦没者数は3万人を超え、桐生市からは7,223名の方々が現役もしくは志願兵として出征をされている。

戦後77年の月日が経過をし、当事者ではない私たちがその当時のことを正確に理解・把握することはもはや大変に難しい局面を迎えているのは事実である。しかしながらそのいずれもが、仮に推測の域を越えないものではあったとしても、かつて国を憂い、故郷を想い、家族を、そして愛する人たちを、押し寄せる戦禍からなんとしてでも自身の手で守りたかった、そうした、ただただ一筋の一念を持って、年端もいかぬ多くの少年たちが、その身を投げうつこととなったこれらの悲しい事実に接し、「命の尊さ」、「命の厳粛さ」、そして、「散った命の不憫さ」に接することのできる、非日常の機会を得られるようなこうした後世に史実を伝えていくことを目的とした施設が果たしているであろう大切な大切な役割について、改めてその重要性を思わずにられない。

決して「美化」してはならず、但し「風化」させても決してならないことがあるのは言うまでもない。昨今の落ち着かない世界情勢の中であって、その事象の全てを関連付けて論ずるような乱暴な真似は避けねばならないが、私たち桐生市にあつてのそれぞれの「恒久平和」に向けた取組みは果たしていま、十分なものであるであろうか。各地にある忠霊塔の整備状況不足、案内看板の不備等が指摘される現状、今後の慰霊祭開催方法や、歴史を遺していくための取組み等について改めてしっかりと、議論をいただくことを強く要望したい。



↑ 富屋3代目女将より受領



↑ 薩摩富士「開聞岳」。少年兵が最期に観た日本

以上